

司式 杉山昌樹牧師

前 奏

奏楽 堀口愛子姉

開 会 招 詞 コロサイ3章16節

\* 賛 美 歌 1:1 (ソングシート)

1. われら主をたたえまし、きよき<sup>みな</sup>御名あがめばや、くる日ごとほめうたわん、  
神にまし<sup>おう</sup>王にます 主のみいつたぐいなし。アーメン

\* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈禱書2 罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去って  
ください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、  
母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも  
白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜び  
を再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この  
口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)  
罪の赦しの宣言

十 戒 祈禱書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

\* 賛 美 歌 1:2

2. 世は世へとうたいつぎ、よろこびとおそれもて 主のくしきわざをつげ、  
いつくしみ知れるもの みさかえをほめたたう。アーメン

## 共同の祈禱 7 宗教改革記念日(10月最終主日)

歴史を支配しておられる神さま、あなたの御前に、次々と信仰の世代が起こされていきます。あなたは、過ちの多い神の民を、忍耐と励ましをもって導いてくださいました。それゆえわたしたちは、聖書から忍耐と慰めを学んで希望を持ち続けることができ、深く感謝します。宗教改革の指導者たちは、「聖書のみ」の精神に立ち、あなたの御言葉の全体が真理であると告白しました。まことに、「あなたの御言葉はわが足のともし火、わが道の光」です。それゆえ、わたしたちは、絶えず御言葉にたちかえり、信仰と教会を改革し続けることができますように。(ローマ15、詩編119)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 盛岡 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 詩編118章1-14節(旧約聖書957頁)

フィリピ1章12-18節(新約聖書361頁)

説教・祈禱 「神の言葉は進む」杉山昌樹牧師

### \* 賛美歌 37:1-2

1. 神はわがやぐら わが強き盾、苦しめるときの 近き助けぞ。  
おのが力 おのが知恵を 頼みとせる 陰府の長も など恐るべき。
2. いかにも強くとも いかでか頼まん、やがては朽つべき 人の力を。  
我とともに 戦いたもう イエス君こそ万軍の主なる 天つ大神。アーメン

### \* 主の祈り 祈禱書1

天にまします我らの父よ  
願わくは御名をあがめさせたまえ  
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ  
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ  
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ  
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ  
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

### \* 頌 栄 66

世をこぞりて、ほめたたえよ みさかえつきせぬ、あまつかみを。アーメン

### \* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 門脇献一長老(司会・受付 次週:門脇陽子長老)

本日 受付 1階:佐藤紀子・若月学執事 2階:森永美保執事 /ZOOMホスト・録音:森永翔馬

次週 受付 1階:大日南隆夫・大日南信也執事 2階:藤井牧子執事 /ZOOMホスト・録音:森川莞太

※ グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

フィリピ1：12-18 神の言葉は進む

食えない人？

フィリピの信徒への手紙を読みます時に、その特徴としてしばしばいわれますのが、パウロの喜びです。今日の所でも、まさに最後の18節で、「喜んでいます。これからも喜びます」と力強く宣言しています。すでに前回お話したことですが、監獄に囚われてしまっている状態で、大喜びしているというのはさすがパウロ先生、頼もしいというか、むしろそれを通り越して食えない人だな、どこまで腹が座っているのだろう、と思わなくもありません。けれども、これはパウロが超人的な精神力を持っているという話ではない、と私は理解しています。むしろ、パウロの喜びの理由は何か、その所を今日一緒にこのところから読み取りたいのです。

宣教の中で一予期しないこと

そこでパウロの思いとして12節の最後の所にある「知ってほしい」という言葉に注目します。意外なことがあったのです。ここで、兄弟たち、という呼びかけは、まずはフィリピの教会に属する人たち、もちろん女性を含めてキリスト信徒たちです。ついでに言いますとフィリピ教会の人たちは、すでにパウロが捕まったことを知っていてパウロの身を案じていました。その人たちに向かって、私の身に新しい事が起きていると語りだすのです。今は捕まってしまって、この先どうなるのかも分からないけれども、しかし、それがとても不思議なことに福音の前進に役立ったという事実が新たに見えてきたというのです。それは、この後、14節以下で具体的なことが語られている出来事においてです。それはパウロ自身以外だった、という体験を知ってほしいという意味です。こういっては何ですがパウロは、比較的トラブルの多い人です。例えば、使徒言行録の17章では、テサロニケ（5節以下）で、続いてペレアという町（13節以下）で、あるいは同じく使徒の19章（23節以下）ではエフェソで大騒ぎになってそこにいらなくなるというようなことがありました。そして、とうとう当局に捕まるということにまでなったのです。この出来事自体はパウロにとっても当然望ましいことではなく、福音の前進どころか停滞と感ぜられていたはずで

知ってほしい変化ーキリストのため

しかし、そのように一見するとマイナスでしかないようなことが、かえって益となったということがパウロに見えてきたのです。そして、実はこの事実、意外性をこそパウロはキリスト者であるみんなに知ってほしい、このように言いたいのです。では、何が福音の前進の益になったのか、ということです。その説明をするのが13節です。そこでは、「つまり」と言っています。このところで語られていることにおいて、ある逆転が起きたというのです。その場合にカギになるのは、「キリストのためである」という言葉です。パウロが、捉えられていることは、先ほどもお話ししました通り、関係者には知られていました。当然、フィリピ教会の人たちにも知らされていて、これは後の方で明らかになるのですが、パウロのためにお見舞いまで送られていたようです。しかし、それもまた、パウロを慰めよう、多少なりとも、マイナスの中で支えになるう、ということで、それ自体は素晴らしいことですが、事態を逆転させるようなものではありませんでした。そのような先が見通せない日々を過ごしている中で、しかし、ある変化が起きたのです。それをパウロは、「キリストのためであると、知れ渡った」という言葉で示しているのです。

キリストが知らせた

ところで、この「キリストのためであると」という言葉は、普通にとりますと、捕えられているその事実の理由がキリストのためだった、変な理由ではないことをみんなが知った、という意味になるはずで

置所を合わせたようなものだったようですが、そこにいる人たちのなかから、イエス様を信じる人たちが起こされ、福音に興味をもつ人たちが生まれていった、という事実があります。ああこの人にイエス様の力が働いていると周りの人たちが理解したのです。しかし、そればかりではなく、パウロが捕まったという知らせが、色々なところで新しい動きを生んでいったのです。パウロが牢につながれている事実は、なんら変わらないのですけれども、しかし、その事実が周りに知れ渡っていく中で、イエス様がそれを用いて、新しい出来事を始めてくださっていたのです。その具体的な新しい出来事とは、まさに14節以下で語られている福音宣教の動きそのものです。そこでは必ずしも、善意からだけではない、動きもあったようだけれども、とにかくパウロが捕まった、という知らせはイエス様によって用いられて、新しく行動を起こす人たちの生んでいったのです。

#### 動機が何であれキリストの宣教

そのような新しい動き全般を語っているのが14節です。ここで「主にある兄弟たちの中で多くのもの」、という言葉があります。この場合の「多くのもの達」には、15節以下で登場します、「妬みと争い」の心を持っていた人たち、と、「善意」をもっていた人たち、その両方を恐らく含んでいます。恐らくというのは、実は他の手紙でもそうですけれども、パウロには何種類もの敵対者たちがいて、中でも、パウロの同胞、ユダヤ人たちは、それがキリスト者であってもなくても、激しく敵対した関係の中にありました。そして、そのような敵はこのフィリピ書では3章（2節）で「あの犬ども」と大変厳しい言い方で登場しています。それに対して、このところの、「妬みと争い」から行動する人たちは、おそらく、信仰の点ではちゃんとした人たちです。ちゃんとしているのですけれども、あまり大っぴらには言えない動機を持っていた、ということのようです。「妬み争い」の心というのは実際褒められたものではないの言うまでもありません。けれども、そのような思いが教会の中で働くことがあるのもまた事実です。どうもこの人が言うことは気に入らない、というようなことが例えば牧師同士の中でも実際にあるように思います。ちょっとしたセンスの問題なのでしょうけれども、そりが合わないということがあります。こういっては何ですが、そもそも牧師は私を含めてですが、よく言えばユニーク、悪く言えば変わっているところがどこかしらあるように思います。しかし、そのような牧師なり伝道者なりの個人の資質は、この際どうでもいい、とパウロは言うのです。むしろ重要なのはキリストが宣べ伝えられているこの事実だ、イエス様ご自身の不思議な導きで、事が進んでいる事実だ、と言いたいのです。

「先生のために」と、ここぞとばかりに

それにつづき16, 17節では、この全く違う動機を持った人たちのあり方がより詳しく描かれております。ここをもう一度読んでみます。「一方は、わたしが福音を弁明するために捕らわれているのを知って、愛の動機からそうするのですが、他方は、自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようという不純な動機からキリストを告げ知らせているのです」。ここで興味深いのは、二つのグループが、同じ一つの出来事、すなわち、パウロが捕らえられて今は、監禁され裁判を受けることになっている、という状態にあるという事実を、どちらも神様の御心だと考え、それぞれに、今こそ自分たちが活動するチャンスだ、ととらえていたにもかかわらず、パウロが牢にいるという同じ一つの事実に対する理解が全く違っているということです。一方は、パウロ先生は、牢の中でも伝道しておられる、そして成果が上がっている、そればかりか手紙をあちこちに出して、それぞれの教会でもよい実りが実現している、そうであれば我々も今こそ伝道に励まねば、というように理解した一方で、パウロをねたんでいる側では、パウロが捕らえられているのは、まさに神様の御心だ、あの男ではなく、我々の方が正しいことがはっきりした、今こそ我々が伝道をして勢力を拡大する良い機会だ、我々が勢力を拡大して、あいつを出し抜いてやろう、というように考えていたらしいのです。そしてパウロは、多分こういった人々の動機をちゃんと知っていたのです。

前進は神からであって人からではない

このような箇所を読んで改めて思われますのは、神様の業の不思議さです。私たち人間は、いずれにしましても欠けがあるので。私たちは、愛のまじわりを追い求めていますけれども、必ずしもいつ

もそれを実現できるとばかりは限らないのです。もっと露骨に言いますと、教会の中で、問題が起こることもまたありうるのです。丁度今日申し込み締め切りの東部中会75周年史という小さな本が近々出版されます。そこでは、当然ですが中会の10年の振り返りがなされています。わたしは、校正刷りをいただいて目を通してありますが、第4章の主に教師の世代交代を語りますところでは第3節としてわざわざ「教会トラブル」という節が設けられています。実際に、この十年で二人の教師が戒規となり、二つの教会が公的に「紛争」状態にあることがはっきりとして、そのための配慮委員会が今も活動しています。また、トラブルということでは公にならなかったものが、いくつもあったと記憶しております。その場合にです。そのようないわゆるトラブルを起こした教師のなしたすべては無意味だったのか、あるいは、そのようなトラブルに見舞われた教会は神様の教会であることをやめてしまったのかと言いますと、そうではないのです。仮に何らかのトラブルが発生してしまったとしても、その教会で、その現場でなされた教師の働き、教会による福音宣教の業がすべて空しい、ということにはならないはずなのです。

#### それがなんだ

もちろん、トラブルで傷を負われた方たちに対しては最大限の配慮がなされるべきです。正義は回復されなければなりません。しかし、そうであるからといって、教会の業は空しい、神様は、教会を見捨てられた、とはならないのです。いろいろな人の思いが交差する中で、しかし、神様の業はなお進むのです。パウロもまたこの時、困難な状況の中にいました。そしてある意味では、仲間である人たちから、そしられ苦しめてやろうとすら思われていました。パウロにしてみれば、自分をもっと伝道したい、と考えていたのとは違う現実が目の前にあるのです。けれども、そこで、驚いたことに、イエス様がこの思わしくない事態を用いて下さって、現実が思いがけず動き出して、福音がより一層広く語られているようになったことが、分かったのです。それで彼は言うのです。「それが何だろう」。「だから何だ」と言っているのです。いうまでもなく、パウロ個人の「思い」という点では面白くないのです。しかし、大切なのはそこではない、ということです。もはや、自分にとってどうか、ではないのです。むしろ、最初の方でお話した通り、自分にとっては不利だと思っていた、入獄という事実によって、新しいことが始まった、それもまたイエス様の御心の実現だったということへと目を開かれた、その事実を知ってほしい、と言ってこの手紙を書いているのです。そればかりか、この事実を知ることができたので、私の思いを超えて、神様が働いてくださることを知ったので、今はすべてを喜び、これからも喜んでいくと宣言しているのです。

#### 神のことばは進む

私たちは、もちろん、あえてトラブルを求める必要はありません。私自身、そんなこととは無縁でありたいと強く願っています。けれども、わたしたちの、これはやめておこう、ですとか、こうしたほうがよいのでは、というような思いをなお超えて、あるいは、私たちにとってはマイナスではないか、と思うようなことを通しても、神様のみ業は、私たちの限界を超えて進んでいくということははっきりとしています。そして、わたしたちが今日くじけても、明日何かあっても、神様はそれを用いて下さり、恵みの業を始めてくださることが出来るだろうというこの見通し、神様の御業はわたしたちがなんであれ確かに進むという見通しは、私たちにとって大きな慰めです。

#### 祈り

父なる神さま。あなたの尊いみ名を賛美します。あなたは、私たちに主イエスを賜り、救いを実現し、今もキリストの体なる教会を治めてくださいますから感謝します。弱い私たちです。そうであるにもかかわらず、自分で何とかしなくてはと、焦ってしまうことが多くあります。けれども、あなたは確かに私たちを愛して、一つ一つの教会を確かなものとしてくださいます。このあなたの御業に信頼して、励まされてこの週を歩むものとさせてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。